

3章 岡山の‘菊桜’

もともと日本に生えていた野生種の桜をもとに、人が新しく作りだして増やした桜を「栽培品種」といいます。‘菊桜’は栽培品種のひとつです。主に「接ぎ木」という方法によって増やしています。なぜなら、種から育てると親木と違う花が咲きますが、接ぎ木で増やせば元の木と同じ分身（クローン）をつくれるからです。この増やし方によって、佐藤清明が守った‘菊桜’を、現在でも当時と変わらない様子で見ることができます。

3章では「接ぎ木」をキーワードに、岡山県各地でどのように菊桜が育成されているのかを紹介します※！

‘菊桜’の増やし方

接ぎ木

芽のついた‘菊桜’の枝を、根元近くで切ったオオシマザクラの台木につないで育てる方法

1

1月～2月に2芽ほどついた‘菊桜’の枝を取り、保冷庫に保存する



2

2月下旬、‘菊桜’の枝にミツバチのロウをつけ、根に近いほうの端を切る



3

根元近くで切った台木（オオシマザクラ）に切り込みを入れる



4

‘菊桜’の枝を台木に差し込み、テープで結びポリ袋をかける



- 2018年から現在（2023年）に至るまで、樹木医の國忠征美さんによって接ぎ木されて増殖しています。
- 高梁城南高等学校では事務補助員の杉山肇さんによって「取り木」（p28）という方法で‘菊桜’が増やされています。

※浅野家の菊桜は、佐藤清明が生命をつないだ‘菊桜’と同じ分身ではありません。高梁城南高等学校、高梁中央公園に関しては、同じ分身かどうか分かっていません。